

拉致問題の解決は、 感情でなく行動で示すことから

蓮池薫さん

新潟産業大学経済学部 准教授、拉致被害者



当時の心情を振り返る

恋人とデート中、ともに北朝鮮によって拉致されるという状況をそう簡単には想像できないと思います。生まれ育った社会から家族も含めて完全に切り離されてしまった絶望感、関係者を除いて誰も我々が拉致されたことを知らないという孤独感は一言では表せません。

ただ、生きていくためには自分たちが置かれている状況を知る術を身につける必要があります。独学で朝鮮語の勉強を始めました。北朝鮮は政治的にも経済的にも非常に厳しい国です。ともに拉致された恋人と結婚し、2人の子どもが生まれ、家族でどう生き延びていくかを常に考えていました。

北朝鮮の指導部が用意した「招待所」で暮らしていた私たちは、常に監視されていましたが、世話をしてくれる人たちとの交流はありました。周囲の草を刈るなど管理人のような仕事をしてくれる人、食材を運んでくる人、料理をしてくれるおばさん…。彼らは私たちが拉致被害者だとは知りません。また、年月が経つにつれて近くの池で釣りに行くことなどが認められるようになり、北朝鮮社会の一般市民の人たちとも交流しました。こうした経験を通じて北朝鮮の人々の考え方を知ることができたのは私にとって意味ある経験でした。月日経っても人の考え方はそう大きくは変わらないはず。今も私は北朝鮮の報道を見聞きするたび、かの国の人々の気持ちを推測します。

拉致問題の解決に向けて、私たちができること

平成14(2002)年、私たち夫婦を含めて5人の拉致被害者は帰国することができました。子どもたちも日本で暮らしています。しかし未だに多くの被害者とその家族が苦しんでいます。私にとっても拉致問題は未解決のままです。

帰国後、私は大学教員や翻訳の仕事をしながらから拉致問題の解決という視点で研究を重ねてきました。それを踏まえて言えるのは、独裁者は強力な権力を持っていますが、それ故に国民が自分をどう見ているかについて非常に神経を使うということです。国民の気持ちを汲み取った政治をするためではなく、効率的に国民を抑えて独裁体制を維持するためです。

拉致問題を考える際、押さえておきたいことが2点あります。拉致は非常に暴力的な人権蹂躪です。しかしこれは北朝鮮指導部の問題であり、国民は直接関与していません。私たちは北朝鮮という国を見る時、そこを分けて考えなくてはなりません。

同時に、北朝鮮の指導部に対しては厳しい姿勢で臨む必要があります。最も重要なのは「解決するまで決して忘れない」という姿勢を見せ続けること。指導部は拉致の発信に敏感です。たとえば集会に参加するなどして多くの人がこの問題に関心を持ち続け、マスコミがそれを報道する。感情ではなく、行動で示す。この積み重ねがボディブローのように必ず効いてくるでしょう。逆に言えば、私たちが拉致問題の解決をあきらめてしまえば、独裁体制を支えることになってしまいます。独裁者が何を恐れているかを冷静に捉え、人権蹂躪を許さない世論をつくっていきましょう。